

平成 22 年度 第一回 CCC 看護学グループ運営委員会 議事概要

I. 日時 : 平成 22 年 6 月 19 日 (土) 16 時 30 分から 19 時まで

II. 場所 : 私立大学情報教育協会 事務局 会議室

III. 出席者 : 宮本委員, 石橋委員, 仲井委員
(事務局) 井端事務局長, 森下主幹, 渡邊職員

IV. 議事概要

1. 検討内容

(1) 学士力の実現に求められる ICT 活用の検討について

看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラムをもとに、看護学の学士力を教育するためには、授業内容をどのように構築し、その中でコア・カリキュラムのどの部分に ICT を活用すれば学生の理解をより深める事ができるか、理想的な教育モデルを作るために各事例を挙げ検討した。

<ICT 活用事例についての検討>

アセスメント能力開発の重要性に着目し、看護学の学習支援について、コア・カリキュラムの II 根拠に基づく看護を展開する力をつけさせるために、ICT の活用が効果があるのではないかという意見があり、視覚教育の効果とその将来的な活用方法について論議した。

現在、e-book (電子ブック) の普及が急速に進んでいる。とくに従来型の電子ブックリーダーの範疇を大きく超え、文字情報のみならず音楽 (音声)・静止画・動画などを NET 上でシームレスに閲覧できる ipad の公開は、大学の授業形態を大きく変える可能性がある。

e-book という視点から考えれば、e-text あるいは e-note という発想が浮かんでこよう。既存の本から e-book (e-text) への移行は、たとえば ipad というデバイスを想定すれば、以下のような変化が予想される。

- ▶ テキスト表示とデータの蓄積
- ▶ テキストに関連するノートの電子化
- ▶ テキストにインターネット関連サイトへのリンクの埋め込み
- ▶ 関連する画像 (静止画・動画) の表示
- ▶ 専門用語などに関する辞書検索
- ▶ 関連する研究論文などの検索と表示
- ▶ 質問やレポートの提出と返却 (双方向の情報交換)
- ▶ 掲示板などを利用した学習グループの討議 (多人数間の情報交換・意見の集約)
- ▶ 他の教育組織との連携 (距離を超えた情報交換)
- ▶ 学生による授業の復習と予習 (時間の制約を受けない情報交換)

これらは、すでに html などの設計発想として既存のものであり、google などにログインすることでかなりの汎用性を確保できるが、様々な制約があるにしろ現実の問題として ipad などのデバイスの普及に伴って PC という枠を離れアンビエントな教育環境への移行が着実に進んでいることが問題となる。このような現状は、2004 年に総務省によって提言された u-japan [、「ユビキタスネットワーク整備」、「ICT 利活用の高度化」、「安心・安全な利用環境の整備」]、さらに「大学力」「教師力」「教育力」「学士力」といった文部科学省が提言する課題とも関連づけて考察する必要がある。

現在、看護教育の分野において、HER (Electronic Health Record) を使用した授業の展開が活発に行われるなど電子化が着実に進み教育的成果を上げている。HER は電子教材導入の好例と言い得るが、e-lecture への移行につれ、大学における ICT を中心とした教育環境の整備とともに教育スタッフの育成という問題も顕在化しつつある。

本委員会では、このような問題意識を基底に置き、委員から例示された産業医科大学「成人看護学総合実習」における IT を活用した授業の実践例などをとりあげ教師・学生の二つの視点から検討を進め

た。とくに注目されるのは、日本赤十字大学杉浦美佐子他「アセスメント能力開発を重視した看護過程学習支援システム」(平成17年度全国ICT活用教育方法研究発表会)の研究である。ここでは、CASYSNUPLの導入に伴う教育的効果などが示されたあとに改善方法などの提言も示されており今後看護教育が進む方向が明らかになっている。

本委員会では、杉浦研究などに依拠しつつ、「看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム」における「Ⅱ根拠に基づく看護を展開する力、(4)根拠に基づいた看護の提供(5)看護の展開方法(6)人の健康レベル・成長発達段階の看護アセスメント(7)個人の日常生活と家庭生活の看護アセスメント(8)地域の特性と健康課題の看護アセスメント(9)看護援助技術の適切な実施」への適応を図るべく、今後も大学教育におけるICT実践に関する研究例を集めた上で、大学における看護教育の在り方についてさらに検討を進めることで委員間の意見の一致が図られた。

<Team-Teachingの導入について>

Team-Teachingの導入について着目し、コア・カリキュラムIV-19保健・医療・福祉チームでの協働・連携でのICT活用がより効果が出るとの意見が出てその具体的な効果に対して事例をもとに論議した。

e-textの導入は、授業の活性化を図るためにはきわめて有効であるが、(1)編集の労力、(2)著作権・肖像権の確保、(3)個人情報の保護、(4)教育環境の維持管理、など従来とは異なった問題が顕在化しその対応が求められている。

とくに大きな問題となるのは、日進月歩の看護教育において情報の有効期間が驚くほど短い、ということである。この背景には医療の世界における看護師の果たすべき役割が日増しに広汎になり、かつ責任が重くなるという実情がある。今後も、教師が学生に提示する資料の有効期間はますます短くなることが予想され、e-lectureの実現には多くの難題が横たわっていると言わざるを得ない。実際、情報学の世界では、教師が配布した資料よりも学生のレポートの方が情報として新しいという事例は事欠かない。看護教育においても情報の更新は避けられない課題である。

また、コンティニュアル・ヘルス・アライアンスの立場から、予防的な健康管理・生活習慣病に対する健康指導・高齢者の自立、などの問題に対処するためには医学はもとより薬学・栄養学・理学療法学・作業療法学・臨床心理学・運動生理学など多岐にわたる教育・研究分野との連携も必要になる。このような学際的な授業の構築は、学科・学部さらに大学という組織を超えて<共創>という理念で統合されるべき授業形態を前提に構築されるべきであろう。

すなわち、教育内容は従来の看護教育の範疇を超え、組織の相互補完関係の構築が必要になり、教育環境のICT化に伴い授業の準備に時間と労力が必要になるにもかかわらず、その情報の劣化はますます激しくなる、という事態が到来しつつあり、このような現状に対していかに応じるかが問題となる。

このような教育の現場における問題を踏まえ、本委員会では、team-teachingについて検討を進めた。とくに昭和大学研究報告「★(出典)および大林真幸「薬・医・歯・保健医療学部横断PBLにおける自己主導型学習」(平成21年度全国大学IT活用教育方法研究発表会)を参考にして、<距離・人数・時間>などを超えた授業の展開に関する実践例を検討し、ルーチンの授業形態としての有効性、電子教材の編集と公開方法、教育スタッフの育成などに注目しつつ次回の委員会までにさらに問題を掘り下げることとなった。

3. 分野別情報教育の整理

「平成22年度CCC看護学FD調査」を踏まえ、以下の(1)~(3)に訂正する。

(1)【到達目標3】の「到達度」

③情報通信技術を活用して作成した情報を提供できる。

→提供および交流できる。

(2)【到達目標3】の「教育内容・教育方法」

③は、情報を提供するための情報通信技術の活用とその結果についてプレゼンテーションさせる。

→ プレゼンテーションさせ、その内容について議論させる。

(3) 【到達目標 3】の「到達度確認の測定手段」

③は、プレゼンテーションは指導者及び担当教員が同席して評価する。

→ プレゼンテーションおよび交流には指導者及び担当教員が同席して評価する。

4. 今後の検討スケジュールについて

次回 CCC 看護学グループ運営委員会は、2010年8月10日10時～12時に開催する。

石橋委員は、NET 参加となる。

5. その他

(1) 次回委員会までの検討課題

大学における看護教育に関する ICT 導入の実践例・問題点と対処法・提案などについて調査を行い報告する。とくに **team-teaching** の立場から、現在どのような授業例が報告されているか具体的な事例を踏まえ考察を進める。